



カリオカの風

リオデジャネイロ日本人学校通信

6月号

令和7年6月 2日
校長 小堺 広司

学校教育目標

「やさしく

かしこく

たくましく」

～世界の架け橋となる子ども
たちの育成を願って～



季節の移ろいとリオ日学生生活の充実

5月24日（土）、モデル校交流を行いました。司会、あいさつ、自己紹介、感想発表、どれをとっても主体的に自分の言葉で話すことができ、ポルトガル語にも自信を持ってチャレンジして、ブラジル人と楽しく交流ができました。

「フルーツバスケット」校長定番の「進化ゲーム」、モデル校主催「単語合わせゲーム」も互いに声を掛け合って楽しめました。充実のリオ日学生生活が始動しました。季節の移ろいととともに、大きく成長しましょう。



<6月2日 全校朝会 校長講話より>

日本から送られてきた麦畑の写真を見せます。黄金色の収穫期を迎えたこの季節を「麦秋（ばくしゅう）」と呼びます。秋のような色合いですが、季節は初夏です。これから冬に向かうリオと季節が反対ですね。

6月20日23時41分、何の数字だと思いますか。これはブラジルの「冬至」の日です。1年で一番昼の時間が短く、この日から冬の始まりとリオの人は考えています。季節の移ろいととともに、皆さんが勉強に励み、友情が深まっていく様子を見るのがとてもうれしいです。

新美南吉の「でんでんむしのかなしみ」を朗読します。

一匹のでんでん虫がありました。ある日、そのでんでん虫は、大変なことに気がつきました。「わたしは今までうっかりしていたけれど、わたしの背中の殻の中には悲しみがいっぱい詰まっているのではないか」この悲しみはどうしたらよいでしょう。

でんでん虫は、お友達のでんでん虫の所にやって行きました。「わたしはもう、生きてはいられません」と、そのでんでん虫はお友達に言いました。「何ですか」とお友達のでんでん虫は聞きました。「わたしは何と言う不幸せなものでしょう。わたしの背中の殻の中には、悲しみがいっぱい詰まっているのです」と、はじめのでんでん虫が話しました。すると、お友達のでんでん虫は言いました。「あなたばかりではありません。わたしの背中にも悲しみはいっぱいあります。それで、はじめのでんでん虫は、別のお友達の所へ行きました。するとそのお友達も言いました。「あなたばかりではありません。わたしの背中にも悲しみはいっぱいあります。そこで、はじめのでんでん虫はまた別のお友達の所へ行きました。こうして、お友達を順々に訪ねて行きましたが、どのお友達も同じことを言うのでありました。

とうとう、はじめのでんでん虫は気がつきました。「悲しみは、誰でも持っているのだ。わたしばかりではないのだ。わたしは、わたしの悲しみをこらえて行かなきゃならない」そして、このでんでん虫はもう嘆くのをやめたのであります。

「殻いっぱいの悲しみ」のように、「生きていくことは楽ではない」「もう生きていけない」と実感したことがありますか？でんでんむしは最後に「もう嘆くことをやめた」とあります。この物語から私たちの周りには「どれほど深くものを感じ、深く傷ついている人がいるか」気づかせてくれます。そして「喜びに向かって生きようとする心」を大切にしていればよいメッセージが込められています。

上皇后美智子様が1998年国際児童図書評議会ニューデリー大会で「でんでんむしのかなしみ」を引用し、「本の中で人生の悲しみを知ることは、自分の人生に幾ばくかの厚みを加え、他者への思いを深める」と話されました。

読書は、

- ・自分の中に、しっかりと根を持つために
- ・喜びと想像の強い翼を持つために
- ・痛みを伴う愛を知るために
- ・人生の複雑さに耐え、与えられた人生を受け入れて生き、一人一人ふるさどであるこの地球上で、平和の道具となっていくために。

大切であると話されました。

季節の移ろいととともに皆さんの成長を感じる今、さわやかなこの季節だからこそ読書を通して、自分の人生に厚みを加え、仲間の思いに気づける人になりましょう。そんな皆さんを応援します。